

「署長等が語る」

高尾森林ふれあい推進センター所長 池田 修

高尾森林ふれあい推進センター（以下「センター」という）の 概要・取組については、前任者が本欄に執筆されているので、今回は、時代と社会情勢の変化で私が感じたことについて記していく。

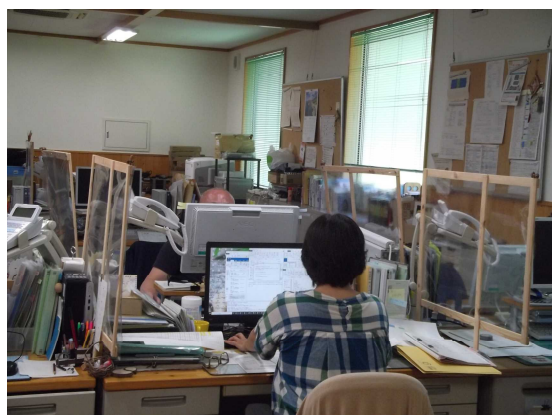
センターにおいてメインとなるのが森林教室である。私の世代では「森林教室」と言っていたが最近は「森林環境教育」に変わってきている。木を植える「植栽」から「下刈」「除伐」「つる切」「間伐」「主伐」等の一連の林業の流れを主に学習する「森林教室」から、森林の様々な働き、大切さなど「森林環境と人と動植物」の関わりについて総合的に学習する「森林環境教育」へと変化している。

学校の先生から色々話しを聞くと「森林環境教育」で学校側が望んでいるのは、実際に森の中を散策し、生徒達で自然の大切さ等を感じ取ってもらえるような学習である。

センターでは森林学習、森林観察の外、学校側と事前打合せを行い森林教室のカリキュラムについて修正を行っている。

令和2年4月1日付けでセンター所長として着任し、業務の内容も把握できていない4月7日に、新型コロナウイルス感染症防止対策「緊急事態宣言」が発令され、人流を制限すべく在宅勤務への移行、展示室・木工体験室の休館等、いきなりの試練にぶち当たった。取り急ぎ職員の理解を得、1週間の在宅シフトを作成し、一時しのぎを経て本格的な在宅シフトに至ったことを思い出す。当初は「緊急事態宣言」の発令が現在（令和3年9月）にまで至るとは想定もしていなかったのである。

着任早々に、事務室のパーティション作成、展示室・木工体験室の模様替え等の直接の新型コロナ感染症対策を職員に実施して頂いた。当時は一時しのぎとして作成されたパーティションではあるが、現在（令和3年9月）になっても感染



症防止対策として活躍している。何時になったらパーティションを外すことができるようになるのだろうか、それともがっちりしたパーティションに更新しなくてはならないのか、不安な日々が続いている。

令和2年度の在宅勤務においては、パンフレットの見直し作成、樹木カードの作成、森林教室・イベントの内容検討、木工の下



地作成、資料の作成等を行った。

センターが主催するイベント等については、「緊急事態宣言」の外出自粛要請が出ている間は原則中止とし、解除期間中は、感染症防止対策を徹底しながら実施した。森林教室等の学校側の要請については、学校側で感染症防止対策を準備頂き実施した。協定団体のイベントについては、主催団体が感染症防止対策を行えるイベントのみ実施した。

令和2年度の森林教室・各イベントの実施は、森林教室13（計画24、中止11）、協定イベント等16（計画41、中止25）と当初計画から半減した。

見た目には森林教室、イベント等の中止が多く身軽な業務となったように思われる



かもしれないが、実態はそう甘くない。「緊急事態宣言」の発令と解除が何度も繰り返され先が中々見通せない中、イベント等の応募を行って参加者を決定し、イベントの事前準備を行う場合も少なくない。このような状態で「緊急事態宣言」が再発令され、イベントを中止せざるを得なくなれば、行き違いが無いよう、中止のお知らせに参加者に電話と郵送により確実に行わなければならないのである。手間をかけた現地での事前準備等が無駄になってしまう。先の見えないイベント等はなかなか手間がかかるのである。



森林教室について、令和2年度前半は中止にする学校が多かった。後半は、新規の依頼が舞い込んで、感染症防止対策に対応させるよう学校側と事前調整を行った上カリキュラム内容を検討し実施した。事前調整後に学校側と現地確認、要するにコースの下見（植物の状況、時間、安全性等）、設備の状況（森林教室を行う建物のスパー



ス、トイレ等)、交通アクセス、雨天時の対応等を現地で確認して頂いている。新型コロナウイルス感染症の影響で、学校側も教育委員会や保護者への説明にご苦労されているのではないかと察する。



センターにとって、イベント・森林教室の拠点である「森林ふれあい館」が令和元年9月の台風19号で被災し、現在も全く使用できない状態になっている。このため、別エリアで森林教室を行っているが、施設の収容可能人数、バスの通行・駐車場等の問題があり、森林教室の要請を断わらざるを得ない支障が生じている。復旧の目途が立っていない「森林ふれあい館」と「新型コロナウイルス感染症」は、森林ふれあい業務にとって大きな障害となっている。このような中、イベント・森林教室をなんとか実施したいと色々な角度から模索し実施にこぎ着けたことは、職員の意識の高さと業務熱意にほかならない。「森林ふれあい館」で森林教室が行える空間とトイレだけでも早期に修復されることを強く願っている。

令和3年9月